

【特別展によせて①】

松浦屏風の歴史的地位

大和文華館所蔵の「松浦屏風」(婦女遊楽図屏風)は、六曲一双の金地の大画面に、美しい衣裳を着た18人も遊女を描いた豪華な作品として有名で、国宝に指定されています。この屏風において、人物がほとんど等身に近く大きく表わされていること、群像描写よりも一つ一つの人物の姿態美、あるいは衣裳美に重点が置かれていることは注目されます。また、この屏風が室内遊楽を表わしているものの、背景が全部金地で環境描写がほとんどないことも特徴の一つです。

こういう「松浦屏風」に関連してとりあげられるものに、江戸時代前期から中期にかけて描かれた一連の「誰が袖図屏風」があります。これは人物を一切描かず、ただ衣桁に色とりどりの模様の衣裳を掛けたところを表わしたもので、衣裳美というものが観賞の対象となったところから生まれた新しい画題です。今回の特別展にも、この「誰が袖図屏風」(根津美術館蔵・写真)が出陳されます。

なお、「誰が袖図屏風」に至る過渡的段階を示すと思われる風俗画に、やはり根津美術館に所蔵され、今回出陳される「誰が袖美人図屏風」があります。これは画面の大部分を衣桁に掛けた衣裳で埋め、その前に二人の美しい衣裳を身につけた遊女と禿を立たせたもので、

ここでは二人の女性が主役であるよりも、衣裳が主役となっています。ところが、「松浦屏風」は風俗画における環境描写よりも、衣裳表現に重点をおいているので、「誰が袖図屏風」や「誰が袖美人図屏風」とよく関係づけて考えられます。こういう「松浦屏風」が、日本近世風俗画の中でどういう歴史的地位を占めるのか、少し考えてみましょう。

室町時代末期から桃山時代にかけて成立した近世初期風俗画は、長い戦国の世が終わって国内が統一され、商工業が興り、都会生活が華美になるという世相を反映して生まれました。それは、いかにも日本の興隆期である桃山時代を中心としたものらしく、豪華な現実感に満ちていますが、結局それは平安時代の和絵以来の四季絵(四季の景趣を描くもの)、月次絵(月々の行事を描くもの)、名所絵(古来和歌によく歌われた名所などを描くもの)の伝統を受けつぎ、それを多様に発展させたものといえます。

こうした近世初期風俗画は、野外に多くの人が集まる祭礼、街頭風俗、野遊びなどを描くのがふつうです。つまり、自然と人間とが一体となった一つの環境を表現するわけですから、人物が数多く小さく表わされます。



誰が袖図屏風・部分

これに対して、江戸時代になると野外の光景を描く風俗画に対し、室内の遊楽図が現われ、時代が下るとともに次第にその数を増していきます。当然のことながら、野外とはちがって室内では背景描写が制限されてきます。こういう狭い視野のもとに展開される遊楽図においては、環境表現よりも遊楽人物の動静、姿態のおもしろさ、ついには衣裳の美しさなどに焦点が向けられてくるのは当然です。

ところで、野外と室内を一画面に描いている作品、あるいは戸外から室内の遊楽を覗きこんだような風俗画は、野外から室内へと移る風俗画の展開において、過渡的な性質を持つと言えます。徳川黎明会に所蔵されている「遊楽図屏風」(相応寺屏風・写真)はこの種の古い一例で、寛永前半期(1630年前後)の制作と見られます。今回の特別展にはこの屏風は保存のため公開されませんが、同種の作品は陳列されます。

楼閣の内外での遊楽の描写がさらに次の段階に進みますと、画面の一部であった室内だけを独立させた画題が成立します。今回出陳される「彦根屏風」はこの種のものの代表作で、六曲一隻の画面のうち、向かって右二扇分は戸外と解釈できる立ち姿の人物四人を描いていますが、残り四扇分は全く室内を舞台としたものです。そして背景は全面金地となり、男女十数名の遊楽に焦点が合わされ、背景描写はほとんどなくなります。そして、室内遊楽の場面に、三味線、双六、手紙、山水屏風などを配し



遊楽図屏風(相応寺屏風)・部分

て、漢画の伝統的画題である琴棋書画で統一してしまうという意識が強くなります。そのようなところから、「彦根屏風」の制作年代は江戸時代前期の寛永年間(1624~44)と考えられているようです。

一方、すでに述べたように、「松浦屏風」は「彦根屏風」と同様に室内遊楽を描写し、背景が全面金地となって環境描写がほとんどなくなるといふ傾向を持っています。また、「松浦屏風」には南蛮カルタ、囲碁、三味線、手紙が描かれていますので、やはり琴棋書画という伝統的画題により統一されていると言えます。そこで「松浦屏風」も彦根屏風とほぼ同じところに描かれたと言えるかもしれません。

しかし、両者の間にはまた相当の性格のちがいが認められます。たとえば、「彦根屏風」が人びとの群像構成や室内遊楽の描写を巧みにおこなっているのに対し、「松浦屏風」の画家は多くの女たちを並列的に配して、むしろ衣裳の美しさを十分に示そうと考えています。つまり、それだけ「誰が袖美人図屏風」や「誰が袖図屏風」に近付いているわけです。そういう点から「彦根屏風」を寛永年間前半の作とする、「松浦屏風」はその後半あたりの作かと思われます。

「彦根屏風」や「松浦屏風」に認められる金地を背景とする姿態美や衣裳美は、やがて一人立ちの寛文美人図につながってゆきます。それはすでに庶民芸術としての浮世絵の世界に近いのです。

(成瀬不二雄)

季刊 美のたより No.68

昭和59年 8月23日

発行 大和文華館

婦女遊楽図屏風(松浦屏風)・右隻

